

# Alert 38号

〔通巻 420号〕  
2019年  
8月6日発行

## 第2期・反天皇制運動連絡会

野次馬日誌 \* 9

集会の真相 \* 10

学習会報告 \* 11

反天日誌 \* 12

集会情報 \* 12

- 今月の Alert
- ◎ 排外主義やヘイトが席捲する状況に抗して今こそ私たちの闘いを —— \* 2
  - 反天ジャーナル ◯ —— きょうじくのりこ、中村ななこ、俺たちに明日はない! \* 3
  - 状況批評 ◯ 皇位繼承問題と「女性・女系天皇」論議の現在 —— 桜井大子 \* 4
  - ネットワーク ◯ 茨城国体反対デモへの招待 —— 加藤匡通 \* 7
  - 太田昌国のみたび夢は夜ひらく (110) ◯ 「政治」と「選挙」をめぐつて —— 太田昌国 \* 7
  - マスコミじかけの天皇制 (37) ◯ 「ナルヒト・マサコ」賛美と「アキシノ・キコ」ブーン  
グの手のひら返し —— (憲天皇制・象徴天皇教國家) 批判その3 —— 天野恵一 \* 8

この春、鈴木裕子著『天皇家の女たち』(社会評論社)という本が出た。古代から現在まで、皇室の女性のあり方・活動・役割を追っている。著者の専門からして近代以降が詳しく、いろいろ知識を与えてくれる。身近に備えておくと大変役に立ちそうだ。

皇后をはじめ皇室の女たちはすいぶん忙しく多彩で広い活動をしていたものだと驚く。この人たち抜きでは近代天皇制は多分姿が変わっていたろうと思われる。ことに近代天皇制の大きな働きである国民の心の一体を作り出す面においてそうだ。「御真影」に夫婦対で写っているのも当然なのだ。

そこでちょっと頭に浮かんだこと。この人びとの働きは、近代日本家族における女の働きを象徴しているようだ。後者についてかつて柳田国男は、日本の家族において女の地位は高く重く、そこには家族を支える上の権限と責任があったのだと言った。このとき彼はこの働きが「家」の存続・継承のためのものだということは軽くやりすごしていたような気がする。皇室における女の働きは日本社会における女の役割を重からしめるのに大いに役立ったというべきだろう。もちろん現在社会の存続と継承のための役割だ。

ところでいま問題の女性・女系天皇ということになるとこの役割はどうなるのだろう。皇后は天皇より一歩さがつて役割を果たしている。この構造は女性天皇ではどうなる?

女性天皇拒否論者は社会における「婦徳」の崩壊をも予感・危惧しているだろうが、賛成論者は女性天皇にどんな日本社会を象徴させようと考えているのか。女性の地位が高まるだろうなどとあくまで見ていると、しぶとい天皇制のことだから、天皇制存続だけ食い逃げされて、性別役割分担社会はそのまま、ということになる可能性もありそうだ。

(信天翁)



●定期購読をお願いします (送料共年間4000円)

●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス

東京都千代田区神田淡路町1-21-7 静和ビル2A 淡路町事務所気付 落合ボックス

TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://www.ten-no.net/mail: hanten@ten-no.net>

●以前の情報はこちら▶ <http://hanten-2.blogspot.jp/>

250円

# 今月の Alert

## 排外主義やヘイトが席捲する状況に抗して今こそ私たちの闘いを



資本主義の「共通価値」として語られていたはずの「公正」や「平等」が、さらに「自由」までもが大幅に毀損されていっている。トランプの「アメリカ第一」は、「自民族優先」さるに世界的な排外主義、他民族排斥やヘイトの潮流として、はつきり時代を画している。こうした状況下で危ぶまれながらも、前回の自民党大勝が多少は是正され、参議院においては改憲与党が2／3を超える構成ではなくなった。しかしもちろんその内実において危険水域は続いている、あらゆる条文や理由を持ち出して改憲に踏み出そうという政治勢力はあまり減少していない。

むしろ、日本国家や社会システムの全体的な衰退の原因を、極右の「特定東アジア」や、国内の「反日勢力」の「存在」に仮構して、権威主義的体制を造り上げようとする動向はいよいよ悪性のものになっている。中国との関係、北朝鮮との関係においては、アメリカへの依存を強いられ、ロシアに対しても「領土交渉」で成果を上げると広言しておきながら、「安倍外交」はほぼその全てを喪失する真逆の「大成果」を上げた。だからこそ、安倍らの日本政府にとっては、韓国への強硬的なふるまいだけが、この愚かな政府への「求心力」を生みだす呪法となつている。

韓国を輸出「優遇」の「ホワイト国」から外すという措置は、日本国内メディアやネット世論を除く世界中の誰の目から見ても、戦

時性奴隸とされた「慰安婦」問題や強制による「徴用工」問題についての報復措置である。これはトランプ流の国内経済第一主義でありなく、「反韓国」世論を煽ることで、排外主義をテロとして国内の諸問題をあるいは打ち消しあるいは歪める政治操作に他ならない。

八月一日から、愛知県で「あいちトリエンナーレ2019」が開催されている。今回は津田大介を芸術監督として、その選考においても男女平等にするなどの注目される試みがあり、多くの作品を集めている。その中のひとつのが「表現の不自由展・その後」という展示がなされている。(https://censorship.social)

このプログラムは、二〇一五年に練馬で開催され、私たちも協力した「表現の不自由展」の発展形とも言つべきもので、二〇一八ナロンでの写真展を圧殺された安世鴻さんの写真、富山県立近代美術館で作品や図録を破棄された大浦信行さんの絵画、そしてキム・ソギヨン／キム・ウンソンさんによる「平和の少女像」など、一六組の作家による表現が一堂に会している。そして、とりわけ日本の戦争・戦史を問題とする作品に対し、歴史修正主義者やヘイト活動家、「ネトウヨ」からの激しい攻撃が、たつたいまも続いている。なかでも「少女像」に対しては、SNSなどで煽動された破壊の危険も含め、河村市長や菅官房長官な

には「平和の灯を一ヤスクーの闇へキャンドル行動」も行なわれる。昨年の靖国神社による「天皇批判」に続き、「カネ」や「女性差別」の問題も露呈するなど、靖国神社など宗教右翼の破滅的な内実も明らかとなり、天皇制や天皇主義者たちはますます揺らいでいる。だからこそ右翼たちの攻撃もいや増すと想定されるし、徳仁による「全国戦没者追悼式」での初めての発言には大きな注目が集まっている。それは、秋の即位式や大嘗祭、来年に予定されるオリ・パラなどを通じ、「代替わり」直後の天皇制を支えるための重要なイベントとしての役割を持つ。即位式は、「天皇に平和を語る資格なし」である。多くの人びととともにこの闘いをかちとつてこきたい。(編集)

## 反五輪国際 week、ハイロー・

「初の」……

嘘はでかいほど信頼され

七四、「四日は」〇一〇〇東京オリ・パラの一年前。と書かれており、七四、「四日から」七四までの八日間、反五輪国際イベントをやった。国際へ、じぶち上げたもののじぶなれ、と思いつのれに、韓国やロス、リオ、パリ……、オリンピックを開催した。する国を始め、各国から来た二〇人を、れる仲間たちと熱のある行動や議論の場を共にした。反五輪の会、研究者のグループ、おじわりソクと共に平昌オリンピック反対連帯やNolympics LAも主催者に加わったシンポジウム、持参したバナーを先頭にしたテモやテモのホール、街宣での段ボールの手作りの被り物やフラガ、大阪から来た仲間たちのビーガン食の応援などなど、私たちの力量をはるかに超える取り組みが成功した。

二二〇には、一九人の仲間と福島へ。大熊町議の木幡ますみさんの話に真剣に耳を傾ける。聖火リレーのスタートはピッカピカのフルーリングだが、国道の弓線から見る帰宅困難区域とのあまつの違いに絶句だ。二七四、上智大学のシンボルではじつしょに行つた「AのLeo」が福島の報道。胸がじつぱいになつた。「No! Olympics anywhere、デモで上げたホールが実現できぬと思えた一週間。Solidarity!

(おじわりソクの会)

代替わりしてからいの「初の」なんとかがじるいとおり、じわじわの報道されるからつこみてしまつ。

一昨日は、『初の、臨時国会召集。なんとも不思議な髪型になつた徳仁は、「国民の信託に応える」とを切に希望』して、わざと夏休み休暇に入つた。一度くらべ全部見て、けばこうのにな。

今年ももうすぐ八月一五日がやつてくる。「初の」「全国戦没者追悼式」が行われるわけだ。明仁や美智子は、やつともではあつたが戦争体験者である。裕仁のやつともとも含めてある意味、実感があるだろ。でも徳仁は、もちろん戦争の体験はない。両親から何を伝えていたのだね。

戦争責任のことは、徳仁自身はあの戦争をどう考へてゐるのか。そして、何を「お」と「は」するのだね。雅子はどう存在するのか？ 徳仁は私と同世代である。その彼かひう考へてゐるかはとても興味深い。

犠牲者の遺族を前に儀式や言葉をまねく」と簡単だ。でも今までよつて、意味のない、虚なものになるであつて、あの儀式を「のよひ」、そしていつまで続けていくのか？

そして昨日は、『初の、死刑執行があつた。

(中村なな)

七四の参議院選挙を前にしてわざとおな世論調査が行われたが、その中のひとつに「信頼NPO」という団体が行つたものがある（有効回答四千人）。

それによると、「日本の代表制民主主義の仕組みを信頼しているか」：「信頼している」32.5%、「信頼してこな」24.4%。全体では、「信頼してこな」が「していな」を上回つたものの、二〇代と三〇代では逆転した。「信頼している」という回答が最も少なかつたのが三〇代で、14.2%。次に少なかつたのが一〇代で20.2%。「日本の将来をどのように見てらるか」：「樂観的である」30.9%、「悲觀的である」47.2%。

注目すべきは、「日本の機関を信頼しているか」という質問への回答。「信頼してしない」の割合が最も高かつたのが「宗教団体・組織」の69.4%で、「政党」67.6%、「国会」60.4%、「メティア」56.6%は、さもありなん。「信頼している」の割合が高かつたのが、「自衛隊」77.0%、「警察」71.6%と、うのは驚きた。そして、もつとも高率で信頼されてこたのは、「天皇・皇室」の87.1%だと。

(俺たかに明日はない)

反天皇制運動



# 状況

## 批評

思想・状況・批評

# 皇位継承問題と「女性・女系天皇」論議の現在

桜井大子

(反天皇制運動連絡会・女性と天皇制研究会)

七月二七日、政府は皇位継承策を協議する有識者会議を年内に設置する方向で検討に入るという。報道によれば、現在の皇位継承順位を前提に、その後の具体的な安定継承策について女性・女系天皇の是非や皇族減少対策を議論するとして、それは前提条件なしに女性・女系天皇に関する議論に踏み込み、今の継承順位を変えるとなれば、皇室制度が揺らぎかねないと判断したというのだ。要するに男系男子を前提に「安定的皇位継承」を検討するところのことか。

この少し前の七月二二日 参院選では、この皇位継承問題は争点となりなかつた。そのことについて『時事通信』は、「女系天皇を認めるかどうかの議論を避けて通れないことか、各党を及ひ腰にさせしるようだ」(2019/7/9)と、各党が女系・女性天皇論議に及ぶことを恐れ、皇位継承問題に触れるに消極的であることを伝えた。同日の『毎日新聞』は、「〔女性・女系天皇〕について、自民党、公明党は考え方を示していない。これでは議論は深まらない」「皇位継承者が先細りする天皇制の現状をどうするのか、各党は選挙戦を通じ、主権者である国民に考え方を説明すべきだ。」議論を先送りにする時間の余裕はもはやない」と、苛立ちを隠さない。この種の「苛立ち」や「焦り」はメディア各社に滲み出でていた。『京都新聞』では「皇位継承のあり方を考える」とは、やはり先送りできない。政府や自民の対応は、議論を避けていると言われても仕方ない」とイライラ気味。(2019/07/10)。『読売新聞』でさえ「安定的な皇位継承のためには、与野党が将来を見越して冷静に話し合える土台づくりが不可欠だ」と書いている。(2019/07/27)

実際はどうであつたかといふと、立憲民主党は「女性・女系天皇・女性宮家容認」、国民民主党は「女性天皇・女性宮家容認」「女系天皇は慎重論議」とする立場を公約で明確にした。共産、社民両党は公約には書かなかつたが、女性・女系天皇を容認すべきだと立場を示していた。維新もこの時点で、女性宮家創設に関する議論を始めたとの報道であった。また、徳仁即位前後になされた

◆天皇主義フェミニズムの登場か?

三〇年前の「代替わり」の時も「女帝論議」があつた。当時は国会レベルではなく、世論もさほど盛り上がつてはいたわけではない。「代替わり」を機に天皇制について考えようとした人たちが、今回よりも圧倒的に多くいたが、そのなかで、女性が天皇になれないのはおかしい、女性もなれるように「皇室典範」を改正せよという、フェミニストたちからの主張があつたのだ。皇室典範の男女不平等が改まれば、女性の社会的地位にも影響を与えるという主張である。それからしばらくは反天皇制運動のなかで女性天皇論議は続いた。私も反対の立場でその議論に参加した。それから約一五年後、小泉政権下の二〇〇四年、二〇〇五年、女性天皇容認のために国会が動いた。現天皇徳仁とその弟秋篠宮

以外に若い男子がないし、これ以上男子出産の見込みもない、という天皇制にとつては大ピンチの事態で、深刻そのものだった。しかし、その年に秋篠宮に男子誕生があつてなく棚上げされ、今にいたる。そしてさらに一五年後の

世論調査でも、八割近くの人が「女性・女系天皇」に賛成している。言つてしまえば安倍が「男系継承の伝統」を尊重する立場を固持し、旧皇族の「皇籍復帰」問題も曖昧にしたままで、「議論を避けてじる」自民党とそれに追随する公明党がいただけで、与党が動かなかつただけなのだ。

国会を構成する野党の多くが女性天皇容認にまわり、世論も八割近く賛成条件付きであれ、推進派にとつては不十分な形ではあれ、自民党は渋々でも「女性・女系天皇・女性宮家」容認に向けた改正案を出さざるをえない状況が予想できる。(とはいっても、いまして)天皇制の近未来を占つてもりはない。関心がないわけではないが、いまはそれではないのだ。

いま、またしても、女性天皇容認論議だ。今回は、女性天皇・女系天皇・女性宮家の三點盛り。いずれは三點盛りに繋がる話だが、前回は表に出る前に棚上げとなつただけだろう。三點盛りが出た今回は、最初から本格的なのだといえる。実際、平成天皇の三〇年で天皇家の社会的存在は大きくなり、国会議員・メディア・人々の関心も高まつていて、皇族と皇位継承者がいなくなつといつ危機感は社会的に大きくなつてゐるところだ。いふなることは三〇年前からわかつてゐたはずなのだけれどね。

絶対にあり得ないからこそ、戦略としての「女帝」容認論をブチあげた反天皇制を掲げる女性たちの論は、ここで終止符が打たれる。打たれなくてはなるまい。伝統主義を貫くべく一部の右翼を除けば、いまや女性・女系天皇の容認しそが天皇制を時代に即した形で継続させる唯一の策となりつあるのだ。また、天皇主義フェミニストとも呼べる人たちの主張も上がり始めている。

最新新聞でも取りあげられた「ヨウツツジの会」というグループだ。二〇一七年に発足し、「憲法違反・性差別の象徴【秋篠宮立皇嗣】に反対の声をあげよう! 意見広告」に募金を呼びかけ、その年の七月に複数の地方紙に掲載。現在会員は三〇〇人といつ。そこでの主張は、「私たちは、今上陛下、皇太子殿下直系の女性天皇を支持します」といつもの。ブログには次のような主張もある。

「女性天皇を支持する国民の会——『性別を問わない直系長子継承』」は安定的皇室存続のための唯一の道。「トのままでは皇室が『国民の象徴』ではなく『性差別の象徴』になつてしまつます。民主主義国の一員として看過できません。」立憲民主主義のもと、『国民を欺くことがない象徴天皇』の存続を願う私たちは今、渾身の力でこの危険な愚行（秋篠宮の「立皇嗣」）を止めなければなりません。」

ただの右翼フェミニストだが、ちょっとづべラル天皇制支持派をも彷彿させられないか?

#### ◆世襲の問題から始めるどう戦略

天皇制と民主主義が共存できると考へる天皇制民主主義に加え、ただの右翼と言つてもいいが天皇主義フェミニズムとも言えそな人々の登場は脅威である。女性天皇の実現で女性の社会的地位向上を訴えた、あるいは、天皇制

廃止といった大変革は困難なので、少しづつ皇室内民主化を図るべきでは、といった論理。かつて次善策としての女性天皇推進を語ったフェミニストたちの論理が、「ヨウツツジの会」というあだ花を咲かせたのか。それとも、まったく別の文脈からこの天皇主義者たちは出てきたのか。いずれにしろ先のフェミニストたちと似て非なることは間違いないが、女性天皇に反対してきた私も、なんどもこの状況には胸が痛くなる。反天皇制の運動と皇位継承問題を、フェミニストの視点でどのように整理し、新たな論理展開をするのか。ともに考えていきたいと思つ。

そして最後に一つ。女系天皇まで認めたとしても天皇制であるかぎり世襲制は残る。世襲制を支える女性天皇が象徴となつて喜ぶのは誰か。多くの女たちもその中に入るかもしれない。しかし、「産む」との強制性は増しても和らぐことはないはずだ。また、皇位継承問題で語られがちな「傍系」か「直系」か、「非嫡出子」か「養子」か「嫡出子」か等々、ウンザリする差別的議論もこの世襲制が根本にある。最終的にイヤな思いをするのも女・子どもなのだ。

いろんな問題があるのは承知の上で、世襲の天皇制をこの国の制度として残すのかという問題から考へる視点は、今の状況ではけつこうけると思つていい。女性の心身を支配する世襲制を否定するところから考へれば、天皇制が問題であることは明確だし、世襲制で成立する天皇が自分たちを象徴するものとしてふさわしいのか、自分たちの意思とは無関係に憲法で定めては妥当なのか、たりには象徴は本当に必要なのかと議論は拡がつていく余地は大きい。もちろんそこからも、植民地政策や侵略戦争の責任問題、身分制度をはじめとする差別の問題、現憲法の三大原則である「主権在民」「基本的人権の尊重」「平和主義」をないがしろにしてしまつ天皇制の継続問題にも繋げていける。

天皇制を不要なもの、あつてはならないもの、といった認識がこの社会のものにならないかぎり天皇制はなくせない。道は遠い。でも、ここに向かうしかない、いろいろ試行錯誤していくしかないと思う。しかし一方で、自分たちの意思で廃止させたい天皇制だが、天皇制の自己矛盾で自滅するのも悪くはないとも思う。男系男子という伝統を抱きしめて廃止になるならば、みんな幸せなのでは、と。

廃止のための切り口は多数ある。とにかく今は声をあげよつ。

## 茨城国体反対デモへの招待

### 加藤匡通（戦時下の現在を考える講座）

天皇代替わりは世間をほぼ祝意一色にして一段落し、ナルヒトとマサコは新天皇・皇后として認められたようだ。圧倒的な贊意の中で、しかしそれでも天皇制反対の声は各地で上がり、様々な取り組みが続いている。

公的行為三大行事は今年から新たに国民文化祭を加えて四大行事となり、六月に愛知で植樹祭が、九月初めに秋田で豊かな海づくり大会が、九月から一月にかけて新潟で国民文化祭が、九月末から一〇月にかけて茨城で国民体育大会が行われる。いずれも「新天皇初の」と冠がつくだろう。三大行事に対してはこれまで各地で反対運動が取り組まれてきているが、近年は寂しい状態になってしまっている。中でも国体は、六〇年代の自治体労組を中心とした国体民主化運動から反対運動が続いている。茨城国体が一九年にあると知ったのは何年前だったろうか。私たち戦時下の現在を考える講座で取り組まねばと話していたらその年に代替わりと決まり、目の前の課題をこなしているうちに直前になってしまった。昨年から集会など国体への

取り組みを行っているが、行政交渉の力量もなく、地域から浮いた単身者ばかりなので地域での国体の浸透や推進の実態もわからぬままに過去の資料を読む学習会が中心になっている。

前回の茨城国体は七四年だった。前年には現職の土浦市長が国体にも使用する国民宿舎建設に関わる収賄で逮捕され有罪が確定したものの、八一年の市長選で再選している。これなど国体と言つては、選挙の度に当たり前のよう札束が飛び交い、「茨城県戦後汚職年表」なんて本が出てくるくらいに汚職に馴染み（…）ある茨城らしいエピソード、かもしれない。大会期間中には馬術競技選手が県内で交通事故を起こし、所属する東京の馬術選手団は出場を中止している。事故を起こした竹田恒和選手は東京オリンピック招致で疑惑をかけられた前JOC会長その人である。事故は示談になつたと言われているが確認できていない。金と地位、あるいは身分（明治天皇の曾孫である）で解決したと勘織られて仕方あるまい。

七四年、開催期間中に茨大で「黒ヘル、駐車場を占拠」があつたと新聞に小さな記事が残つている。全国組織まで作られた国体民主化運動もいつのまにか消えてしまった。前回国体で茨城県内にどのような民主化運動があつたのか、今一つ確認

できていない。今回の国体では自治労も自治労連も県教組も取り組みはしないと明言している。今動いているのは反天皇制運動としての国体反対運動だけだ。八月の学習会ではそんな報告をする。かつてのように子どもを大量動員したマスゲームはなくなつたし、自治体職員の八割が大会に駆り出され行政窓口が機能しなくなるようなこともなくなつた。だが、花いっぱい運動のような道德臭の強い運動は地域を巻き込んで続けられているし、学校でも子どもたちは選手や観客として動員されている。「おことば」も天皇警備もなくなるはずもない。銃剣道は隔年となり、今年はeスポーツが加えられ、二三年からは国民スポーツ大会へと名が変わり、と国体は改革の真最中らしい。それでも、天皇制を支持する「国民」を作り出すための儀式の一つであり、私たちを動員することを通じて「国民」へと統合しようとする天皇行事としての本質に変わりはない。私たちが求めるのは国体の民主化や改革ではなく廃止であり、天皇制そのものの廃止である。

九月二八日の開会式当日、会場の笠松運動公園に向けてのデモを予定している。最寄駅まで三・五キロ、バスもなく延々雑木林を歩く道なのでデモコースの設定で悩んでいるが、とにかくやるだ！新天皇初の国体に、共に茨城で反天皇制の声をぶつけよう！行動の詳細はしばしお待ちを。

そして、各地でさうなる天皇制廃止の闘いを！

参議院議員選挙の結果を見ながら、選挙の前にも存在していた、そして後にも続く「政治」のことを思つた。選挙とは、今やあたかも、「一日だけの主権者」が「代議員」を選んでしまうだけの行事と化している。「選ばれる」者は、絶対得票率から言えば全主権者の一六・一〇%程度を獲得できただけなのに、「全権」を委託されたと居直り、「選ぶ」側は必要な時には「コール権」行使しなければ選挙はその意義を半減させてしまつ」とにも無目覚に、すべてを議会任せにしてしまつ。その繰り返しの果てに、「議会制民主主義」はひどく形骸化した。世界じゆうでそつだが、とりわけ現在の日本は、惨！ の極致だ。

今回は、選挙だけに拘泥せずに、「政治」そのもののことを見てみる。去る七月一七日は、朝鮮戦争休戦協定締結（一九五三年）から六六年目を迎えた記念日だった。休戦協定締結から六年も経てしながら、それを平和協定に進展させる「政治」を行ない得なかつた者は誰か。共和国で言えば、金日成、金正日、金正恩の三人だ。韓国で言えば、李承晩以降の大統領は二二人を数える。この戦争の当事国である米国も、休戦協定以後の交渉には必要欠くべからざる存在だが、六六年間に二二人の大統領が在

る。武裝闘争で勝利した革命家たちはどんな「政治」を行なつてきただろうか。革命初期、社会的公正を確保する政策路線の下で、教育・医療・福祉など年間の「政治的無為無策」への責任を、軽重はあっても何らかの形で負つてはいる。金正恩、文在寅、トランプは在任中だから、行く末を見なければならぬとしても、朝鮮半島の住民は、こんな「政治」への怒りを心の底に秘めているに違ひない。あるいはこんな「政治」を変えることができない主権者であるはずの自らの無力を託つか。

朝鮮国には「選挙」の自由もなければ「コール」の権利もない。そこで行なわれてきた「政治」の責任は、第一義的に三代の独裁者に帰せられよう。韓

国の場合、軍政時代もあり、六六年間を一様に論じるわけにもいかない。日本も、休戦協定問題の直接の当事国ではないが、朝鮮に対する植民地支配の

加害国として、広く朝鮮半島の平和のためにどれほど積極的な政策を行なつてきたかという観点から、六六年間の「政治」のありようが厳しく問われる

だろうか。いずれにせよ、「政治」の在り方は、所与の社会に生きる人びとの生死をこれほどまでに牛耳るものであるのに、為政者が冷酷なブルジョア

代表であれ、初心は理想と夢に燃えていた革命家であれ、現状ではどの社会にあってもろくな「政治」もろくな「選挙」も行われていないことには疑いようもない。人類は、「政治」や「選挙」の賢いやり

方をいまだに弁えてはいない時代を生きている。

（8月2日記）

# 太田昌國の夢は夜ひらく 110

みたび



## 「政治」と「選挙」をめぐつて

當を攻撃した日である。その後のキューバ革命運動の主体が「七・一六運動」と名乗るのは、この日付を記念日としたからである。それから六年後の一九五九年、カストロたちは独裁政権を打倒して、革命は勝利した。したがつて、今年は革命から六〇周年の年に当たる。

武装闘争で勝利した革命家たちはどんな「政治」を行なつてきただろうか。革命初期、社会的公正を

年間の「政治的無為無策」への責任を、軽重はあっても何らかの形で負つてはいる。金正恩、文在寅、トランプは在任中だから、行く末を見なければならぬとしても、朝鮮半島の住民は、こんな「政治」への怒りを心の底に秘めているに違ひない。あるいはこんな「政治」を変えることができない主権者であるはずの自らの無力を託つか。

朝鮮国には「選挙」の自由もなければ「コール」の権利もない。そこで行なわれてきた「政治」の責任は、第一義的に三代の独裁者に帰せられよう。韓国の場合、軍政時代もあり、六六年間を一様に論じるわけにもいかない。日本も、休戦協定問題の直接の当事国ではないが、朝鮮に対する植民地支配の

加害国として、広く朝鮮半島の平和のためにどれほど積極的な政策を行なつてきたかという観点から、六六年間の「政治」のありようが厳しく問われる

だろうか。いずれにせよ、「政治」の在り方は、所与の社会に生きる人びとの生死をこれほどまでに牛耳るものであるのに、為政者が冷酷なブルジョア

代表であれ、初心は理想と夢に燃えていた革命家であれ、現状ではどの社会にあってもろくな「政治」もろくな「選挙」も行われていないことには疑いようもない。人類は、「政治」や「選挙」の賢いやり

方をいまだに弁えてはいない時代を生きている。

マスコミの天皇制  
37

## ナルヒト・マサミ「ナルヒト・マサミ」賛美と「アキシノ・キコ」ブーリングの手のひら返し

——〈壊憲天皇制・象徴天皇教国家〉批判 その3

天野恵



七月一五日、「徹底検証 ナルヒト天皇制」(主催「終わりにしよう天皇制!『代替わり』反対ネットワーク」)

の集会。私は問題提起者の一人として「代替わり」奉祝報道批判のテーマで発言。

NHKが「皇室の祖先は天照大神」と平然と報道していることに象徴される「天皇を中心とする神の国日本」という、大日本帝国憲法ト(天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス)の神話のイデオロギーと「万世一系」の天皇の皇室神道(退位・即位)儀礼が公然と露呈されてる状況。この政府・皇室・マスコミが一体化して演出してつくり出している、不気味なムード(正面からの批判の声は、存在していないのか?)とく伸びやかにしている。

この状況を、私たちは、かつての天皇制ファシズム(神権国家・國家神道)のまるごとの復活と考えるべきではない。「神話」には「日本の伝統・文化」といつ

フトなペールが被せられており、退位していく天皇も即位する新天皇も「現人神」ではなく「尊敬されるべき、最高に偉い、素晴らしい人間」という人柄の賛美の衣が幾重にもかけられているのだから。こうした象徴(人間)天皇制の政治マジック(イデオロギー操作)が全面展開されるのであり、私たちはこの〈象徴(人間)天皇教〉のイデオロギーを内側から食い破つていく作業を日常的につみあげていかなければならぬのだから。

「こういう趣旨の発言をしながら、この集会の場ではふれる時間はなかつたが、「令和の御代の末永き弥榮をお祈り申し上げます」という「新天皇即位の賀詞」決議問題。この共産党まで賛成した国会での「決議」に

よる「天皇陛下万歳」(翼賛)国会の成立という恐るべき状況という問題がもあつた。

「天皇代替わり」の国家の政治こそがこうした状況をつくり出してしまつてはいるのだ。原則を決定的に踏み外した転向は、とめどない転落への入口である。かくのことき状況全体を見据えた、押し戻していく運動的努力が私たちに求められてはいるのだ。天皇(制)といふ政治的踏み絵の力は十分に生き続けている。

さて、今、マスコミを支配しているのは(甦ったマサミ)を媒介にしたナルヒト天皇賛美である。代表的なレポートを一つ紹介する。「紀子さま」逆風がもつけ幸ひで……『雅子皇后』復権をもたらしたらつの僕伴(週刊新潮)7/25号は、こう書き出されている。

「『公務を休まれて批判を受けていた頃とは、たたずまいがまるで異なります』/古参の宮内庁職員を感嘆せしめた新皇后は現在、まさしく別人のように満足感をつれての外交準備のワガママぶりが、新天皇家の人気ぶりと「コントラスト」に語られている。この流れで、「国論」分どう「愛子さまの悠仁さま論争を封印」(週刊新潮)7/25号)は、こう書かれてはいる。

「『公務を休まれて批判を受けていた頃とは、たたずまいがまるで異なります』/古参の宮内庁職員を感嘆せしめた新皇后は現在、まさしく別人のように満足感をつれての外交準備のワガママぶりが、新天皇家の人気ぶりと「コントラスト」に語られている。この流れで、「国論」分どう「愛子さまの悠仁さま論争を封印」(週刊新潮)7/25号)は、こう書かれてはいる。

「きわめつきは「10人の宮務官が7人に」秋篠宮家の職員が辞めている」(週刊文春)8/8である。こので調が続くとは、我々も予想していませんでした」/そう語る話すのは宮内庁担当記者である。「5月下旬に来日したトランプ大統領夫妻の歓迎行事ではフル稼働され、統いて6月1日からは「全国植樹祭」で出席のため1泊2日の日程で愛知県へ行幸啓されました。これ以上皇夫妻から受け継いだ大切な行事で、四大行幸啓の一つである。晩餐会などのお疲れが残つていればあるいはご欠席か、という一抹の不安があつたのですが、それも杞憂に終わり、皇后さまはにこやかにお務めを果たされていました」その後も好調のまま……。

このにあるのは、「皇位の安定的継承」のための明仁「生前退位」から「女性天皇」の実現へという政治プロセスに、人々の人間的関心を集中させるイメージ操作であるにすぎない。

〈象徴(人間)天皇教〉の「皇位の継承」という土俵

この後、この好調の理由を具体的に論じてはいる。元外交官の面目躍如の「外交」がマスコミで大絶賛、この「代替わり」ヨイシヨ記事の大洪水と人々の歓迎がりが、彼女を「自信回復」させたというのが第一。「手のひらを返したような」マスコミの論調変化が、第一の理由とその「手のひら返し」の代表メディアがそう書いているのだから笑うしかない。第一が「眞子婚約スキャンダル」などでの、浩宮・雅子のネガティブイメージに対比して、持ち上げられていた秋篠宮家の逆風に、心理的に救われたというお話。皇后になつちまえば、マスコミは自動的にそちらの方についていくというわけだ。

こうした流れは、娘「愛子」賛美へと必然的に運動する。「支持率80%の脅威!『愛子天皇』を潰したい『安倍官邸』の皇室戦略」(週刊新潮)8/8号)は男系主義にこだわる安倍首相は高まる愛子人気がつくりだす「女性天皇」容認論の支持の拡大を押さえ込むため、(国論)「分どう「愛子さまの悠仁さま論争を封印」(週刊新潮)7/25号)は、こう書かれてはいる。

# 一野人風日誌

7月1日～7月31日

7月14日

7月15日

7月19日

7月20日

7月26日

7月27日

7月28日

7月29日

7月30日

7月31日

7月32日

7月33日

7月34日

7月35日

7月36日

7月37日

7月38日

7月39日

7月40日

7月41日

7月42日

7月43日

7月44日

7月45日

7月46日

7月47日

7月48日

7月49日

7月50日

7月51日

7月52日

7月53日

7月54日

7月55日

7月56日

7月57日

7月58日

7月59日

7月60日

7月61日

7月62日

7月63日

7月64日

7月65日

7月66日

7月67日

7月68日

7月69日

7月70日

7月71日

7月72日

7月73日

7月74日

7月75日

7月76日

7月77日

7月78日

7月79日

7月80日

7月81日

7月82日

7月83日

7月84日

7月85日

7月86日

7月87日

7月88日

7月89日

7月90日

7月91日

7月92日

7月93日

7月94日

7月95日

7月96日

7月97日

7月98日

7月99日

7月100日

7月101日

7月102日

7月103日

7月104日

7月105日

7月106日

7月107日

7月108日

7月109日

7月110日

7月111日

7月112日

7月113日

7月114日

7月115日

7月116日

7月117日

7月118日

7月119日

7月120日

7月121日

7月122日

7月123日

7月124日

7月125日

7月126日

7月127日

7月128日

7月129日

7月130日

7月131日

7月132日

7月133日

7月134日

7月135日

7月136日

7月137日

7月138日

7月139日

7月140日

7月141日

7月142日

7月143日

7月144日

7月145日

7月146日

7月147日

7月148日

7月149日

7月150日

7月151日

7月152日

7月153日

7月154日

7月155日

7月156日

7月157日

7月158日

7月159日

7月160日

7月161日

7月162日

7月163日

7月164日

7月165日

7月166日

7月167日

7月168日

7月169日

7月170日

7月171日

7月172日

7月173日

7月174日

7月175日

7月176日

7月177日

7月178日

7月179日

7月180日

7月181日

7月182日

7月183日

7月184日

7月185日

7月186日

7月187日

7月188日

7月189日

7月190日

7月191日

7月192日

7月193日

7月194日

7月195日

7月196日

7月197日

7月198日

7月199日

7月200日

7月201日

7月202日

7月203日

7月204日

7月205日

7月206日

7月207日

7月208日

7月209日

7月210日

7月211日

7月212日

7月213日

7月214日

7月215日

7月216日

7月217日

7月218日

7月219日

7月220日

7月221日

7月222日

7月223日

7月224日

7月225日

7月226日

7月227日

7月228日

7月229日

7月230日

7月231日

7月232日

7月233日

7月234日

7月235日

7月236日

7月237日

7月238日

7月239日

7月240日

7月241日

7月242日

7月243日

7月244日

7月245日

7月246日

7月247日

7月248日

7月249日

7月250日

7月251日

7月252日

7月253日

7月254日

7月255日

7月256日

7月257日

7月258日

7月259日

7月260日

7月261日

7月262日

7月263日

7月264日

7月265日

7月266日

7月267日

7月268日

7月269日

7月270日

7月271日

7月272日

7月273日

7月274日

7月275日

7月276日

7月277日

7月278日

7月279日

7月280日

7月281日

7月282日

7月283日

7月284日

7月285日

7月286日

7月287日

7月288日

7月289日

7月290日

7月291日

7月292日

7月293日

7月294日

7月295日

7月296日

7月297日

7月298日

7月299日

7月300日

7月301日

7月302日

7月303日

7月304日

7月305日

7月306日

7月307日

7月308日

7月309日

7月310日

7月311日

7月312日

7月313日

7月314日

大嘗宮◆11月に催される「大嘗祭」の舞台となる大嘗宮の地鎮祭が、建設場所の皇居・東御苑で行われる。

【7月21日】

秋篠宮、紀子◆鹿児島市の「鹿児島アリーナ」で、全国高校総体の開会式に出席。全国高校総合文化祭の開会式に出席するため、九州新幹線で佐賀県へ移動。

## 美空の「音楽相

議会を浸蝕する差別主義・レイシズムを許すな！7・14集会

今から一〇年前、フィリピン人一家に對し在特会らはその追放を叫び、激しく攻撃した。直後、京都朝鮮学校襲撃事件も起こしている。これをきっかけに差別主義団体は勢いづき街頭活動を活発化させつゝヘイトスピーチを拡散させた。二〇一六年にヘイトスピーチ解消法が成立すると、在特会初代会長桜井誠は日本第一党なるものを立上げ、都知事選に出馬した。議会にも触手を伸ばしたのである。

今集会は日本第一党のよつた露骨なヘイト団体のみならず、現に議員である者がいかに議会を腐らせてしまっているのか、その背景や現状に迫る。先ず、研究者の立場から明戸隆浩さんにお話いただいた。明戸さんは石原都政

皇位繼承◆政府が安定的な皇位繼承策を協議する有識者会議を年内に設置する方

向で検討に入つた。

【7月28日】

秋篠宮、紀子◆佐賀市を訪れ、全国高校総合文化祭（総文祭）の特別支援学校部門の活動発表を見て回る。全国高校総体が開かれている鹿児島県に九州新幹線で

時代に遡り、政治家によるヘイト事例を取り上げつつ日本第一党等の排外主義政党の問題に言及した。その根幹にあるのは旧植民地時代に培われた優越感であり、連綿と続く無意識の差別感情であろう。しかし、露骨な差別言動にもかかわらず差別ではないとするのは「歴史否定」一般化した概念で、既に生じた差別による加害を否定したり、過小評価したり、正当化」するからであると語る。

次に、被害者の視点で取材をしてきた神奈川新聞社の石橋学さんから、ヘイトスピーチ根絶のため川崎市が提案している「（仮称）川崎市差別のない人権尊重のまちづくり条例」の説明があつた。この案の前提には激しいヘイトデモ（私も力ウンターに加わったがともかくひどかった）の歴史がある。この条例案の画期的な側面はヘイトスピーチ解消法が理念法であるのに対し五〇万円までの罰則規定を設けたこと、「ヘイトスピーチにつながつていく土壤に、直接対処する」ものであることだ。ただ、ネット上のヘイト

移動し、バスケットボールの試合を観戦。シング国際シンポジウム2019」開会式に出席。

【7月29日】

徳仁、雅子◆「地球科学・リモートセンシング国際シンポジウム2019」開会式に出席。

秋篠宮、紀子◆那須御用邸から帰京。

秋篠宮、紀子◆鹿児島県霧島市の「牧園アリーナ」で、全国高校総体のフェンシ

いすれにしろ、議会を浸蝕する差別主義・レイシズムとの闘いはこれからである。

## 徹底検証！ナルヒト天皇制

アキヒトの生前退位発言から続いた皇室大ファイバー報道も、退位・即位儀式を経て、十月に行われる大嘗祭までしばし休息か、メディアの加熱報道は現在吉本興業の話題で持ち切りだ。

ナルヒトが新天皇になつた直後は、皇室祭祀や儀式に続き、トランプ米大統領との会談のような「外交」や晩餐会の模様を、新皇后マサコも同時に持ち上げる新天皇夫婦賛美報道が続いた。

さらに国会や地方議会では「即位を祝う賀詞」があげられるなど秋にむけ翼賛体制が進められている。

ングの試合を観戦。午後、帰京。

【7月31日】

秋篠宮、紀子、悠仁◆北海道函館市と沖縄県から訪れた小中学生60人の「豆記者」を、東京・赤坂御用地にある赤坂東邸に招き、懇談。悠仁の同席を検討し、秋篠宮、紀子が了承したと報道。

おわてんねつと主催で七月一五日に、文京区民センターで表題の集会を行つた。最初に井上森によるナルヒトの半生を振り返るスライドトーク。膨大な映像の量は、ミッチャーブームから始まる皇室情報報をTV媒体を通して「国民」にいかに浸透させていたかを物語つていて。

それを受けるような形で、天野恵一は「代替わり」奉祝ファンズム報道の分析を行い、続いて、桜井大子は、「皇位繼承問題」に焦点をあて批判した。

最後に小倉利丸さんはナルヒトと水(グローバリズムの觀点から)をテーマに「象徴天皇の政治的な関与」の傾斜、政治利用の可能性を示唆された。

今回、「ナルヒト時代の日米同盟」も重要な視点として柱を立てていたが、発題者の方合で今回のお楽しみとなつた。参考者一三〇人。

(桃色鰐)

南京大虐殺・靖国に抗議した香 港人弾圧を許すな！

七月一七日、12・12 靖国神社抗議見せ

しめ弾壓を許さない会による、「南京大虐殺・靖国神社に抗議した香港人弾圧を許すな！7・7集会」が開かれた（文京区民センターハウス、500人）。この日行われた第六回公判で弁護側証人尋問が行われ、裁判が大きな山場を迎えたことを受けたものだ。昨年一二月、南京大虐殺・靖国神社に抗議する行動を行ない、あるいはそれを撮影して逮捕・起訴された郭紹傑（ゲオ・シウギ）さんと嚴敏華（イン・マンフ）さんは、度重なる保釈申請も却下され、不当な勾留がすでに八ヶ月を超えている。集会は、都留文科大名誉教授の笠原十九司さんの講演から始まった。

笠原さんは、学界において南京大虐殺の事実と死者の数などもほぼ確定しているにもかかわらず、安倍晋三が中心になつて取り組んできた教科書攻撃の「成

しめ弾圧を許さない会による、「南京大虐殺・靖国に抗議した香港人弾圧を許さない！7・1集会」が開かれた（文京区民センター、五〇人）。この日行われた第六回公判で弁護側証人尋問が行われ、裁判が大きな山場を迎えたことを受けたものだ。昨年一二月、南京大虐殺・靖国神社に抗議する行動を行ない、あるいはそれを撮影して逮捕・起訴された郭紹傑（ゲオ・シウギ）さんと嚴敏華（イン・マン）ワさんは、度重なる保釈申請も却下され、不当な勾留がすでに八ヶ月を超えている。集会は、都留文科大名誉教授の笠原十九司さんの講演から始まった。

笠原さんは、学界において南京大虐殺の事実と死者の数などもほぼ確定しているにもかかわらず、安倍晋三が中心になつて取り組んできた教科書攻撃の「成

果」として、中学校の歴史教科書から「本軍慰安婦」の記述が消え、「南京大虐殺」の死者についても具体的な数値が消えていたことなど、歴史修正主義の安倍権にとって、南京と靖国が重要な意図を持つてきたことを明らかにした。一人の香港人に対する常軌を逸した攻撃は、この政治姿勢の反映でもあるはずだ。結果として、当日の証人尋問に立った田中宏さんと和田仁廉夫さんからの発言、長谷川台士による法廷報告もなされた。

て「祝賀資本主義とオリンピック」、一二  
日・福島フィールドワーク、同日夜・平  
昌・東京・パリ・LAナイトピクニッ  
ク、二三日・記者会見とメディアワーク  
ショップ、二四日・オリンピック大炎上  
新宿デモ、二五日・研究者・ジャーナリ  
スト研究会、二六日・討論集会、二七日・  
パネルディスカッション、とハードな  
日々。私は二二日と二三日を除いて、参加。  
疲れただと面白かった。内容報告は割愛。  
反天連界隈が力を注いだのは二四日の  
デモ。参加者二三〇名でアルタ前もデモ  
も賑やかな行動となつた。警察も慣れな  
い外国人対応にどうして良いかわからな  
いという風。面白かったが、来年はそう  
もいかないよね。連日ピョンチャン・パリ、  
リオ、ロス、ロンドン、等々からの海外  
参加者も含め、たくさんの参加者で賑わつ

## 〔學習會報告〕

島園進「神聖天皇のゆくえ——近代日本社会の基軸」

(筑摩書房、二〇一九年)

島薦は、岩波新書「國家神道と日本人」、春秋社「明治大帝の誕生」と本書を、自身の近代天皇制に関する三部作と位置づける。ほか、片山との対談も含め、いわゆれも近代天皇制の成立をめぐる通史として読む限りにおいては叙述として共通しており、読みやすい見取り図にはなつている。

で醸成され「完成」し、かつて支配イデオロギーとして猛威をふるった「神聖天皇」の思想をひも解いてみせるが、それが「象徴天皇」としてなおある現在の問題点については、あまり分析を加えようとしない。一九四五年以降に、戦後改革により國家神道が否定され「現人神」も否定されながら、皇室神道や天皇の祭祀が明には否定されず残存させられたこと

として天皇制の歴史的責任を免罪させた  
る戦後歴史学のドクマが、島蘭に實か  
れてゐるからだろ。しかし、それこ  
そが政治家や官僚などから不可触の権  
力を確保しようとする「神聖天皇」の  
本質ではないのか。

天皇制が「仁政」と「慈惠」の「福  
祉国家」の基軸であるかのように天皇  
や皇族がふるまい、それを受容する社

により、むしろそれが天皇制の根幹となつたことについても、問題の所在を示しながら論述を避ける。これは、「天皇は権威であつて権力ではない」として天皇制の歴史的責任を免罪させた戦後歴史学のドグマが、島薗に貫かれているからだろう。しかし、それが政治家や官僚などから不可触の権力

会やメディアの状況など、指摘されておりさうに踏み込まねばならない問題は多い。それにもかかわらず島薗は、天皇や皇族の「公私三元論」の構造に触れず、明仁や秋篠文仁の発言には肯定的だ。議論では、政治史分析の枠組みを欠いていることへの批判が多く出た。

次回は八月二〇日、伊藤智永「平成の天皇」論（講談社新書）を読む。

(蝙蝠)

7・20—7・27開催一年前!反五輪国際イベント

て「祝賀資本主義とオリンピック」、二二日：福島フィールドワーク、同日夜：平

